

高津区おはなしアーカイブ

●大久保政二(おおくぼ まさじ)さん

大正 11 年 2 月生まれ 92 歳

川崎市高津区末長在住



◆子ども時代のお話を聞かせてください

6人兄弟の長男です。2人がすでに亡くなっていますが、私を含めて男3人と女1人はこの近くに皆住んでいます。

橘小学校に通いました。あの頃は尋常小学校といって、久末の子どもたちも皆来てました。同級生はだいたい50人くらいで毎年、10人くらいの変動はありましたね。戦前までは、そんな感じでしたが、戦後は人数が増えました。でも、農家の子がほとんどです。なんせ300軒以上ありましたから。

農繁期は早く授業が終わるんで、下校後は畑に直行して、手伝いました。稲刈りのあとの家族と食べる昼の「のら弁当」が楽しみでねえ。弁当と言ったって、今のような卵焼きが入ってるわけでもなく、確か漬物がおかずだったかなあ。米だって麦が3分

か4分入っていました。まあ、真っ白いご飯は嬉しいことがあるような時だけですよ。

その他の思い出は、影向寺の縁日ですね。当時は12月に開催されていて、家族みんなで行きましたよ。境内や寺の周りには、見世物小屋やおもちや、バナナの叩き売りなどの屋台が出て、とても賑わっていました。

尋常小学校のあとは、2年制の高等科に進学しました。卒業後は農家を継ぐか、仕事を見つけて働きに行くかですが、私は農家を継ぎました。親が私が継ぐのを待っていた感じでしたから。

◆戦時中の暮らしぶりはいかがでしたか

田んぼで米を作り、畑で麦を作り、庭では芋などを作りました。あとは、アワやキビなどの雑穀です。

本当に1年中忙しかったですよ。なんせ、田んぼの稲を植えて、刈り取ったと思ったら、また麦まきですからねえ。そのうち、東京のほうから野菜が入ってきてね、野菜も作るようになりました。

昭和14、5年くらいにはキュウリやナスを作って市場に行ってお金にしました。それに伴い、養豚や酪農もしました。最初は、豚が臭くて大変でしたが、すぐに慣れましたねえ。鶏は戦前から自分たちで食べるためだけに、5、6羽は飼ってました。

昭和12、3年頃に玉電が開通し、その頃に多摩川に橋もできました。

それから徴用が来ました。川崎の小向にある自動車や飛行機などのキャブレターを作る日本企画という会社でした。名古屋の三菱飛行機や中島飛行機にも使われていたと思います。今は言えますが、水冷式部品などを作っていることは当時は秘密でした。軍需工場があり、研修生というか養成工という養成期間が3ヶ月ありました。毎日憲兵が見回りに来て注意するんですよ。今思っても私らの仕事は役にたってたんでしょかねえ。

昭和18年に召集令状が来ました。今の世田谷区三宿あたりでしょうか、現在の東邦病院のところの東京騎兵1連隊に入隊しました。検査を受けた後、帰してくれずに1週間後に北朝鮮のピョンヤンに行かされました。部隊が、歩兵隊と輜重隊(しちょうたい)とに別れていましたが、私は車などを運ぶ輜重隊に配属されました。

当時の北朝鮮は、裕福な人もいましたが、村は藁屋根をヒモでしばったような貧しい家も多かったです。

仕事は、ピョンヤンで飛行場を作るのが目的でした。地元の朝鮮の人達と一緒に1日中、トロッコで砂利を引いて勤労奉仕ですよ。その砂利が重たいのなんのって。飛行機は谷と谷の間に隠してましたが、ガソリンがないので飛ばせなかったのか、そのうちに戦争に負け、使わなかったようです。

◆終戦のときは

幸運なことに戦争に負けるその年の1月に復員しました。終戦まで向こうにいたら、本当ならシベリア送りですよ。北朝鮮では、爆撃や空襲はあまりなかったですから、戦争に負けるとは思ってもみませんでした。

しかし、神奈川に帰ってきたら、こっちのひどさに驚きました。一生懸命に畑を耕しても、軍需工場のために作物を供出したり、空襲の被害を受けたりで。このへんは、けっこう空襲がありました。外の防空壕に逃げましたが、上から直撃されたら、たまったもんじゃないですよ。養福寺の北側の方にグラマンが落ちた話は聞いてますが、実際には見てません。増福寺、明鏡寺や民家数軒が焼けましたが、この家は残りました。

終戦は24歳のときです。本当に戦争に負けると思っていなかったのですが、玉音放送は淡々と聞きました。梶ヶ谷は戦前と戦後では日本の状況の変化のように、あまり変わりませんでした。

◆その後の生活の変化は

戦争で亡くなった方も多かったし、農地解放もありました。戦後は、専業農家として主に米作りに励みました。田んぼの汚染などもありましたが、車の普及で生産も向上して、発展したと思います。復員後にオート三輪車の免許を取ったことも大きかったです。昭和16年に1回目の車の免許をすでに取っていたので楽でした。今ほど試験

は厳しくはなく、今の六角橋のところで、教官と一緒に乗って取るような免許ですよ(笑)。特に車は好きではないですが、父親がすでにオート三輪を持っていましたし、戦前は16、17歳で取れたのです。それから、どんどん車に乗る人が増えて、もう更新時には、臨港警察に人が並んで大変でした。戦時中でガソリンが手に入らずに乗れなくなったので、オート三輪を手放しました。

北朝鮮から復員するとき私は独身でしたが、その後26歳で結婚しました。妻は野川出身です。男の子2人と女の子1人に恵まれました。

◆当時の末長の様子は

私は、関東大震災の1年前に生まれていますが、当時の母は、薪がないので米や風呂を炊くのが大変だったようです。代わりに麦ガラやワラを使ったようです。皆、井戸水でしたが、つるべの上げ下げが大変でした。

正月は、持ち回りで親戚の家に遊びに行きました。お赤飯など炊くときは、もち米や小豆もすべて自家製です。

夏祭りは、集落ごとにありました。お寺は明鏡寺で、神社は杉山神社です。縁日が出るほどでもなかったなあ。氷水(こおりみず)か、饅頭を売る店が2、3軒くらいでしたね。氷水は今のかき氷のようなもので、カンナで氷をかくんです。それでも子ども

心に楽しみにしていましたよ。戦後はキャンディーを売りにくる人もいました。

また、秋祭りは10月に杉山神社で開催され、豊作祈願をしていました。住民の演芸や村芝居、おみこしなどがありました。

買い物は、村に1軒だけのなんでも屋の渋谷商店です。今はありません。久末には飴屋が1軒だけありました。

末長では、広い土地に80軒くらいが散在してました。子育て地蔵のある、あの用水路の所にも人は住んでいて、田んぼに行くにはかなり不便だったと思います。

夜は街灯もないから真っ暗です。戦時にはまだ日本光学があったから少しは、明るかったのですが、戦後は会社の寮があってもそんなに電気は使わないし。関東自動車学校の敷地から末長方面を見たら、真っ暗でしたね。あれだけ暗くて寂しい道なら、悪い人も出ないですよ(笑)。昔の人は提灯を使っていたと聞いたことがあります。田園都市線が開通してからも梶が谷駅には昼間でも人が来ない感じでした。その後、末長は田んぼを将来住宅地にするために、区画整理が行われました。

◆現在の末長は

自宅は梶が谷駅の近くです。町名変更で末長1丁目になりましたが、今も昔も平凡な町だと思います。この家の前の竹やぶもずっと昔からのものです。昭和39年のオリンピック景気や、昭和40年に第三京浜がで

きたことにより、かなり交通の便が発展し人口が増えました。昭和45年頃には木造アパートも増えました。

市民プラザに行く途中の道沿いの家々は、オリンピック景気も影響したのか、熊谷組が谷を埋めて作ったと言われてます。ただ埋め立てても水位が上がるので、東京の土ではない土を運んだそうです。そして、梶が谷駅ができてから、人家が増えました。

昔は高津区と宮前区は一緒でしたね。宮前区と別れて、高津区が宮前区の人口より増えて今や22万人と言われてます。

人口が増えて車も多くなりましたが、どこに行っても駐車場の心配があるので、バスが楽で良いですね。

◆92年の暮らしの中で思うことは

このへんは、人口が増えても農家は16軒に減ってしまいました。なんだか都会っぽくなり、交流がないのは寂しいですね。

健康の秘訣をよく聞かれますが、畑仕事をして、土とともに生きてるからでしょうかねえ。私は、毎朝6時半起きですが、もう1日中働くのは無理です。今はキャベツやブロッコリーなどを作っています。酒は以前からそんなに飲まなかったもので、もう飲んでません。夜中に何かあったら、困りますしね。

同窓会も20人くらいいたときは開いてましたが、もう少なくてやってません。

今まで食糧や病気に関して、特に苦労したなあと思ったことはないですねえ。

来年は待望のひ孫が生まれる予定です。それが一番の楽しみですね。

(平成26年10月29日実施)